

## 満州分村移民教育－長野県南佐久郡佐久穂町立佐久東小学校の閉校

伊藤 純 郎\*

### はじめに

平成 23 年 10 月 29 日、筑波大学大学院教育研究科教科教育専攻社会科教育コースで開講されている民俗学実習で、長野県南佐久郡佐久穂町大日向地区を調査していた私と大学院生 22 名は、大日向地区の小学校である佐久穂町立佐久東小学校の閉校記念式典に参列した。

佐久東小学校は、明治 6 年に大日向村竜興寺に開設された修道学校に始まり、正道学校・高陽学校・昇陽学校・海瀬学校、大日向尋常小学校（明治 22 年）、大日向尋常高等小学校（明治 32 年）、大日向国民学校（昭和 16 年）、大日向小学校（昭和 22 年）と続き、昭和の大合併で佐久町が誕生した昭和 31 年に佐久町立佐久東小学校となり、平成の大合併で佐久町と八千穂村が合併して佐久穂町が誕生した平成 17 年に現在の学校名である佐久穂町立佐久東小学校となった小学校である。

昭和 22 年度には 322 人の児童が在籍した佐久東小学校も、高度経済成長以後の過疎化の中で年々児童数が減少し、昨年度から新入生が佐久中央小学校に入学したため、昨年度の在籍児童は 2 年生から 6 年生 34 人、今年度の在籍児童は 3 年生から 6 年生 22 人と大幅に減少した。この結果、当初の予定から一年早く平成 24 年度から佐久中央小学校と統合することになり、佐久東小学校は今年度をもって 139 年の歴史に幕を閉じることになったのである。

佐久穂町内外から約 200 名が出席した記念式典では、実行委員長・学校長・児童会長・町長・教育長のあいさつに続いて、「佐久東小学校の歴史を振り返るスライド」の上映が行われ、佐久



写真 1 佐久穂町立佐久東小学校閉校記念式典

東小学校 139 年の歴史が映し出された。その後、児童により「ふるさと」「夏の思い出」「もみじ」などの音楽発表や佐久東小学校の歴史や学校生活の様子が劇として紹介されるとともに、佐久東小学校卒業生が作詞・作曲した「自然」が披露された。最後に、大日向地区と交流がある北佐久郡軽井沢町大日向地区から来られた「大日向ふれあい音楽団」により音楽が披露された。

記念式典の終了後、「佐久東小学校跡地」と刻まれた記念碑の除幕式が行われた。記念碑の土台には大日向地区の石材が使用されたという。

### 満州分村「大日向村」

長野県南佐久郡大日向村は、千曲川の上支流、群馬県境十石峠から発する抜井川の溪流のほとりに、県道岩村田・万場線に沿うた峡間の底の村、東西二里二十四町の間、八つの部落をならべ、夜の明けるにおそく、日の没するにはやく、とくに南に聳えたつ茂来山は濃い陰翳で全村を蔽ひ、ために冬

\*筑波大学

などは三時にははやくも大上峠に日は沈み、昔から俗に半日村とさへ呼ばれてゐる。大日向村とは名ばかりの暗い日陰の村である。

この文章は、昭和14年6月に朝日新聞社から出版され、ベストセラーとなった農民文学作家和田伝の小説『大日向村』の冒頭の一節である。

周知のように、大日向村は昭和13年から始まる満州分村移民の第一号となった村である。「大日向村とは名ばかりの暗い日陰の村」が、総戸数の半分にあたる200戸の満州分村移民を決定したのは、昭和12年3月20日に開かれた大日向村経済更生委員会であった。

昭和13年6月、過剰な農家を満州へ移住送出することにより、適正な規模の農家で母村を再編成する満州分村移民が、農山漁村経済更生運動のなかで国策となると、大日向村は満州分村移民のモデル村とされ、朝日新聞社発行の『アサヒグラフ』をはじめ、満州移住協会が発行する雑誌『拓け満蒙』や『新満州』、小説『大日向村』、前進座特別大公演「大日向村」、映画「大日向村」、さらにはほとんど知られてはいないが紙芝居「大日向村」により全国に喧伝された。なかでも、1940年10月に封切りされた国策映画「大日向村」では、母村大日向とは比較にならない生産力豊かな満州の沃土と活気に満ちた開拓団・開拓村や理想的な満州分村を建設するため広大な土地を耕す日本人の生き活きとした姿が映し出された。また、紙芝居「大日向村」では、白黒版の映画とは異なり、太陽が「真赤に燃えあがる」正真正銘の「大日向村」が色彩豊かに描かれた（拙稿「語られた満州分村移民、描かれた大日向村、満州」『信濃』第62巻第2号、2010年2月）。

### 満州分村移民教育

大日向尋常高等小学校は、こうした満州分村移民の意義を児童・生徒に説き、満州分村移民政策を推進する教育の場となった。

満州移住協会が発行する雑誌『拓け満蒙』特

派記者に対して、「『国策の認識は先づ児童から』といふ見地から毎日の様に満州移民の重大性について熱心に教育してゐる。だから大日向村の小学生は親たちよりもづつと満州の事はくわしく知つてゐる」（『拓け満蒙』第1巻第7号、1937年11月）と答える大日向尋常高等小学校森泉茂松校長の言葉を裏づけるように、同校『学校日誌』には満州移民に関する講演会、満州事情に関する講話、満州移民の活動写真会などの記事が記されている。

小学校における満州分村移民教育の成果は、昭和13年3月に創刊された大日向尋常高等小学校文集『やま路』に、児童・生徒の作文として披露された。

#### 満州移民 五年 男

僕は大きくなつたらどんな事があつてもあの広い広い満州へ行つて満州大日向村をうんとよい村にし、うんと日本人が多く移民するやうにしようと思つてゐる。此のせまい島国の土地よりも、あの広い広い満州の土地はどんな大またで飛んでも一足には飛べない。だからどうしてもこんなせまい日本に居るわけにはいきません。大きくなつてからと言つても、もう五年か十年後にはきつと満州へ行く事が出来ると思ふと嬉しくて大きくなるのが、まちどうしくてならない。早く大きくなつて満州大日向村をりっぱな村にしよう。

また、昭和12年8月15日付で創刊された『大日向村報』第6号（昭和13年1月15日）に掲載された五年男子児童の作文は、教員により一部が添削され、2月1日発行の『拓け満蒙』第2巻第2号に、「満州の新天地」と書かれた五年男子児童の習字とともに掲載された。さらに、同じく『大日向村報』第6号に掲載された「どんどん行かれないやうな人は腰のけです」と書かれた「満州移民村へ」と題する五年女子児童の作文は、題名が「満州大日向村の皆様へ」と改められて文集『やま路』第一号に掲載され、『大

日向村報』とともに先遣隊や満州大日向村に送られた。

文集『やま路』から次の二つが指摘できる。一つは、「将来自分も立派な満州分村移民になりたい」という児童の素直な想いが吐露されたと思われる、しかしその内実は教師により一部が添削された類の作文が掲載されたことからうかがえるように、文集『やま路』が、満州分村移民を児童に決意させるうえで教師の説得とともに重要な教育装置となったことである。

二つは、文集『やま路』を通じて 母村大日向村と満州大日向村の間で精神的紐帯が強められる一方で、「五族協和」の満州国という認識や満州の地で暮らす人びとに対するまなごしは閉ざされていることである。

文集『やま路』は、児童・生徒に満州分村移民熱を昂揚させ、満州分村移民を推進する原動力となった。

佐久東小学校の139年の歴史のなかで、満州分村移民との直接的な関わりはわずか8年に過ぎない。しかしその8年の歴史は、佐久東小学校はもとより、満州移民史や日本近現代史にとって極めて重要なものである。



写真2 閉校記念碑「佐久東小学校跡地」

## おわりに

民俗学実習最終日の11月1日、私と大学院生は、佐久東小学校を再び訪問し、在籍児童や先生方と交流会を実施した。

あいにく6年生は修学旅行で不在であったが、3年生から5年生児童16人と交流した。まず総合の時間・国語科・社会科の授業を参観し、その後体育館で佐久東小学校対筑波大学対抗のドッジボールなどスポーツを楽しみ（院生の「大人げない」、普段の講義では見られない真剣な姿を目のあたりにし）、昼食時には給食ルームで全員一緒に食事をとった。

前日の10月31日に小海高等学校で実施した今年度で11回を数える交流会とは異なる、最初で最後となる佐久東小学校児童との交流会を楽しんだのである。